# 椎名麟三全集

■

小説 4

冬樹社

椎名麟三全集 2

昭和四十五年九月十五日初版第一刷発行

著　者—椎名麟三
発行者—高橋直良
発行所—冬樹社　東京都千代田区神田神保町二—一八
　電話東京二六四—〇三四六　振替東京七七五七
印刷所—三容堂印刷株式会社
製本所—一重製本株式会社
装幀者—栃折久美子
写　真—講談社写真部
定　価—二〇〇〇円
© Rinzo Shiina 1970
0391-02002-5190

# 第四巻目次


公園の裏……3
誘惑者……21
歳末……43
古びた地図……61
静かなる村……93
邂逅……115
残酷な幸福……311
無邪気な人々……327
過去からの声……361
帰省……383
隣人……403

海の女……421
不幸な意識……439
妻の失踪……449
解説……松原新一……471
解題……485

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 小説 4

# 公園の裏

湯本盛夫は、表通りから、T公園の裏へ、オート三輪車のハンドルを切った。エンジンが痙攣的なうなり声をあげた。八月の強い日ざしが、涼しげな影にかわった。木の葉の影が、水のようにちらちらする狭い坂道。彼は速力を落してのろのろ進んだ。汗がどっと出た。風のない、むし暑い朝。彼は、片手で汚れたワイシャツの胸まで開いた。腐った尿のような匂いがむっと鼻をついた。彼は、自分の身体が、動物園のような気がした。おれは動物のように生きて来たし、動物のように生きている。しかしこのことは、少しもおれの気持をくじくことは出来ない。彼は微笑した。今日近所の人たちを運んで行ってやる多摩川。きらきらする水。広い白い河原。石炭をまいたような人出。しかし、くら子は行かないだろう。彼女の暗い顔。挫折そのものの女。挫折に自分を奪われ、挫折にユーモアをもつことが出来ない女。彼女のいつもしばりつけられている、じめじめしている貧しい台所が彼女を変えてしまったのだ。彼は、舌打ちした。あの女は、自分が自由であることすら知らないのだ。たとえ人間が、動物以下の石であっても、石の自由が、すべてを生み、すべてをつくり出すのだ。たとえ動物であり、石であることが、人間として救うことの出来ない挫折であって

も。

盛夫は、公園の柵ぞいに坂を上った。片側に何段にも仕切って、売地の札の出ている空地。つづいて古びた大きな家の前を通った。物干台に白い布が干してある。あまり家がくろずんでいるので、その白い布が、かえって不調和な感じがする。道から門へ溝を越えて渡してある石の板に、タイヤが触れて、ごとっと重い音を立ててゆらいだ。祠のある小さな森。その向うに一かたまりの低い長屋の家々。おれが生れ、おれが育って、おれの離れることの出来ない場所だ。そこから四、五人の子供たちが、歓声をあげながら、転ぶようにして坂をかけ降りて来た。彼は、そのめいめいが、ふだんよりきちんとした服装をしているのを見て、微笑した。彼は、ラッパを鳴らしながら、怒鳴った。

「そら！　のかないと泥をひっかけるぞ！」

三人の男の子は、公園の柵へとんで、そこへへばりついた。二人の女の子が溝の方へ逃げ、溝のなかへ落ちそうになって立往生した。一瞬前の笑いを失った、真剣な心配そうな顔が彼の方を見つめた。二人は、おたがいに道の方へ向きながら、安物のワンピースを大事そうに両手でしっかりと身体へ押しつけていた。まるで大人のようなしぐさ。彼は微笑しながらブレーキをかけた。五人の子供は、いやな仕事から解放されたように、ふたたび歓声をあげて、彼の車の方へとびかかって来た。盛夫の弟の安志が、その友達へ忠告した。

「これ、あんちゃんの会社の車だよ。……汚したら、親方に叱られんだぞ」

荷物台の側板を蹴りながら、後へ乗ろうとしていた岩田の息子は、あわててとび降りた。安志は、満足した。ぴかぴかしたオート三輪車。新品だ。山口酸素という白いペンキの字だって新しい。二人の幼女が、その安志へ聞いた。

「さわるくらいなら、さわってもいいでしょ」
「さわるくらいならいい」と安志は、許可を与えた。
盛夫は時計を見た。こわれているガラスの割れ目で、九時をさしている短い針が二重に見えた。十一時までに荏原の工場へ、酸素ビンをとりに行かなければならない。彼はラッパを鳴らしながら、低い家々を見た。もう何年となく一緒に暮して、おたがいにかくすことがなくなってしまった家々。あちこちから、あわてふためいているおかみさんたちの、叫び散らしている声がきこえた。一番向うの端の家から、くら子が蝗のようにひょいと道へとび出して来た。痩せた棒のような身体。シュミーズのようなワンピース。彼は、先夜、この公園の木蔭で、彼女を抱いたときを、自分の手に感じた。かたい小さな乳房をしていた。きっと彼女は、発育不全なのだ。彼は、彼女の方を見ながら、くすぐったくなった手をズボンにこすった。彼女は、まぶしいのか、顔に手をかざしてこちらを見た。顔が手の下で暗い空洞になり、ただ顎のあたりだけが、手のかげから取りのこされて白く光っていた。彼女は、手をおろして、家の中へ何か叫んだ。ふたたびやせた顔が、光のなかに戻っていた。くら子は、家のなかへ入った。小学二年になる彼女の弟は、押入のなかへ頭を突っ込んでいた。
「何してんの?」とくら子は、情けない声でいった。「湯本さんのあんちゃんが待ってるじゃないの!」
「夏休み帳がないんだよ。夏休み帳!」と弟は、泣き出した。「写生の絵を描けって、先生がいったんだのに」
「ちゃんとして置かないからだよ」
くら子は溜息をついて家へ上った。五つになる彼女の妹が、青い顔をして寝ていた。腹をこわしたので、妹は行くことが出来ない。妹は、不服を思い出したような眼で、くら子を見た。涙をためていた。くら子は、

床の間に乱雑に積んであるぼろぼろの漫画や絵本の間をさがした。盛夫さんは気がよすぎると、彼女は、オート三輪車へ得意然と乗っている盛夫の姿を思いうかべた。会社の車を勝手につかって、首になったら、どうするんだろう。ふいに彼女は強い不安に打たれた。あんなことをして首になったら！　盛夫が、事務所へ呼ばれている。汚ない盛夫の酸素会社の事務室。狭くて暗くて花もない。会社員という名にそぐわない四人の荒くれた男たちが、電話へ大声をあげている。紙片がその男たちの神経のように、乱雑にぶちまかれている四つの机。ひとりいる女タイピストは、それらの男たちから無視されて、書類箱のかげへ押し込まれて、忘れられてしまったようにひっそりしているのだ。盛夫は、その「親方」の前へ立っていた。びっくりして真白にかわった彼の顔。化石のようになった身体。彼は、もう生きては行けない。親方が、早く行けと、その彼の身体をじゃけんに押した。彼は、石像のように棒たおしになった。どすんという重い音。彼女は身ぶるいした。彼の身体が、汚ない板敷の床へ、粉々の土くれになって散っていた。危うく残った首の土の色。彼女は、涙をうかべた。あの人が首になったら、わたしは死ぬだろう。催促する車のラッパの音が、遠く聞えた。わたしとあの人は、一緒になれない運命にあるのだ。彼女の弟が、急にはずんだ声をあげた。

「あったよ！」

彼は、自分の夏休み帳と鉛筆をもって表へとび出した。おれは行李の下へかくしていたのをすっかり忘れていたのだ。おれはこれに家のことを書いてやった。郵便配達夫の父の給料、七千五百円。薬品会社へつとめている兄の給料、四千八百円。父はいつもきげんが悪い。兄は、パチンコばかりしてます。そして、ねえさんは、いつも死にたい、死にたいといってます。くら子は、駈け出して行く弟の後から、小走りについて行った。ほんとに何の希望もないわたしなんか、死んでしまった方がいいと思った。オート三輪車は、向きをかえていた。四人の近所のおかみさんたちが、賑やかに車へ目白押しに乗っている。いずれも四十前後の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

主婦。ひとりは子供を負っていた。くら子は、自分は笑いたくないのに、笑い出していた。みんなが、子供と一緒になってわめき立てた。

「早く、早く！　早く！」

「おばさんおねがいします！」とくら子はいった。

総勢十二人が、たたみ一畳にもたりないひろさの場所へ押し込まれた。盛夫は、くら子の弟をつめこんで、後の側板をあげた。自家用車にでも乗っているように興奮しているおかみさんたちの声。その家族を見送る人々。盛夫の父の石造も出て来た。植木職の石造は、いまから地主の山本の家へ仕事に行くところだ。道具を入れた合切袋を肩にかけていた。電車なんかは混んでいて乗れないとか、貸切みたいだとか、中年の女たちの賑やかなやりとり。盛夫は、危険はないかと見廻った。人間は、空の酸素ビンとはちがう。くら子は考えた。こんなに人を乗せておまわりさんに叱られないだろうか。

「ずいぶん待って？」とくら子はいった。

盛夫は、自分の顔を、ぬっと彼女の方へ突き出した。汗と埃でよごれた顔。くさった妙なにおいが、彼の身体からにおった。彼女は、思わず顔をしかめながら後ずさりした。盛夫は、いまいましくなった。

この女は、たしかに自由をもっていない。だからおれを愛することは出来ないんだ。彼女はただ、おれから愛されているだけなのだ。彼は、なおもその彼女を追うように顔をつき出し、左手で顎をしきりにこすって見せた。きちんと三ミリずつ生えのびた不精ひげ。

「見てくれ」と彼はやっと強い語調でいった。「待ったも待たないもあるもんか。え？　そうだろ。見てくれ。待ってる間にひげが、こんなにのびてしまったじゃないか」

子供たちは一斉に盛夫の顔を不思議そうに見た。主婦たちは笑った。

「くら子さんも行けばいいのに」とひとりの主婦がきさくにいった。
車が動き出すと人々は理由もなく笑った。彼は、坂をのろのろ下り、それから畑ぞいの道をつっきった。日はかんかん照った。多摩川あたりの白い雲が、洗いたての瀬戸物のようにぴかっと光っていた。後の女たちは、めいめいハンカチや手拭で頭を蔽った。さわぎ立てる子供たち。公園から一キロほどはなれているある官庁専用のグランドにそって、廻った。グランドにはまだ人影もいない。片方には麦畑がひろがっていた。もう少し行けば広い国道に出るのだ。国道。そこでおれは、少しスピードを出すだろう。子供たちの恐怖と歓喜のいりまじった叫び声。彼は微笑した。突然向うから、乗馬が走って来た。山本という地主だ。馬に鞭をくれた様子だ。黒っぽい鳥打帽。鼻の下に太い真白な髭が見える。そして小さな眼が、明らかにおれたちを見つめている。軽蔑と嘲笑と憎悪のいりまじった暗い眼だ。おれたちをとび越えるつもりなのか。彼は、あわててブレーキをかけた。衝突！　ああ、近所の人々への責任！　散乱した肉と骨。苦痛のうめき。血の洪水！　全体が、大きくゆらいでとまった。前輪が、畑のなかへ半ば落ちかかっていた。馬は、彼の車の直前で、体をかわした。危険は去った。彼は冷汗のながれているのを感じた。彼は思わず車を降りて怒鳴った。
「気ちがい野郎！」
馬は、並足になっていた。ゆらゆらと尾を二、三度上下に立てた。糞を落していた。馬の尻の、盛り上った二つの丘が、交互にくりくりと動いていた。山本の中佐時代の乗馬靴と拍車が光っていた。山本老人は、馬に揺られながら、いまいましく呟いた。豚ども！　ほんとに馬蹄にかけてやればよかったのだ。主婦たちも、車の上に思わず立ちはだかっていて、馬の後をながめていた。唇の色をかえ、口も利けなかった。二人の子供が、いまごろになって、あわててとび降りた。盛夫は、ふたたび吐き出した。「気ちがい野郎！」
肥料会社の人夫の妻が、我をとり戻したようにいった。

「ああ、びっくりした。山本さんは町会長さんだろ。だからわたしたちだけが隣組へ入らなかったんで、おこっているんだよ」

彼女は、入ってもよかったのではないかと思った。会社員の多田さんの奥さんが勧誘に来た。防犯協会という名ですが、もとの町会みたいなものです。会費は、月二十円。多田さんは班長さんだ。わたしは、主人や御近所の方と相談しますと答えた。この話は、区役所の方から話があったので、もとの町会の人たちが、それを受けついでつくったのですと、班長さんの奥さんはつけ加えた。わたしは、びっくりした。また戦争になるんですか、といった。隣組をつくったからって、また戦争になるわけじゃない、と奥さんはわたしへ教えるように笑った。この町の親睦会みたいなものです。わたしは、自分の無智を恥じた。でもやはり、隣組をつくると戦争になるような気がした。山本老人は、グランドの鉄鋼の柵にそってまがった。豚ども！あいつらの時代はもうすぎたのだ。雌伏五年の春秋。もうあいつらの勝手にさせないぞ。くら子の父と同じ郵便局につとめている須藤の妻は、感嘆したように、人夫の妻へ答えた。

「追放解除のお祝いに、娘むこからもらったあの馬に乗って、威張りたいんだよ。何しろあの馬、五十万円もするんだっていう。ええ！　馬をよく知っている、うちの人がそういったから、ほんとだよ」

郵便局員の妻は、夫の顔を思いうかべた。丸いにわとりのような眼。あの人は、びっくりすると、すぐあんな眼をする。山本さんの家へ一日に祝電が十七通も来た。中村が、その電報をとどけたとき、ビールの一打箱が、二つも三つも玄関に積んであった。盛夫は、エンジンをかけて叫んだ。「さあ、行くぞ！」

あわてて車へかけ上った屑商の子供がいった。

「いい馬だなあ。きれいな尾をしていたよ」

盛夫の弟が注意した。

「車にきずをつけたら、あんちゃんが親方に叱られるんだよ」
車が、動き出すと、人々は頓狂な歓声をあげた。盛夫は、車を後ずさらせて、方向を正すなり、出発した。子供たちが、口をそろえて叫んだ。走れ！　走れ！　わっ、ほい！　山本老人は、鞭をもった左手で腰の後を強く押した。腰から尻にかけて強い痛みが走った。坐骨神経痛がまた起ったのだ。借り物の馬。早くかえさないと競馬の馬だから、娘むこの山崎がいやがるだろう。しかし、わしは終戦以来、はじめて馬に乗ってわしの一切をとり戻した。すべてを見る眼が、もとのように明らかになった。非理法権天。あの白雲の悠々たる天を見よ。天は、いつまでもつづいて来たし、いつまでもつづいて行く。つづいて来たもの、つづいて行くものに対しては、何者も打ちかつことは出来ないのだ。全く思想や、豚どもに何が出来るものか。つづけること、そしていつまでもつづけて行くこと、それがわしの使命だった。しかもつづいて来たものはつづくのだ。それが天の理だ。彼は、ふたたび痛む腰に手をあてた。見て見ろ。アメリカだって天皇陛下をどうすることも出来なかったではないか。通りがかりの人々が、珍らしいものを見るように、馬と山本老人を見ていた。山本老人は、見られている自分に、自然な威厳を感じた。彼は、自分の家の前で降りた。山崎の馬丁が出て来た。溝にかかった石が、ごとりと鳴った。山本は、馬丁にいった。
「もう明日から馬に乗らない。山崎君によろしく礼をいってくれ」
坐骨神経がひどく痛み出した。盛夫の父の石造が、脚立に乗って、植木の枝をおろしていた。その鋏の音が、何となく山本のかんに触った。石造は、不機嫌そうに自分を見上げている山本を見下して、挨拶した。鼻の下の真白な髭。黒いほくろのような斑点が、大きなゆるんだ顔にちらばっている。生気のないゆるんだ顔。この間、風呂から上って裏縁で身体をふいていた山本の身体を思いうかべた。何も彼も大きい身体。あれも大きかった。しかしそれは醜くだらりと下っていた。死んだ亀造爺を湯灌してやったとき、亀造爺のあ

れそっくりにだらりとしていた。石造はいった。
「旦那。この樫の木は、床屋をやって、気持よさそうにしてまさあ」
「石造。……お前ところの近所の奴等は、実にけだものだ！　総理大臣は、あのような奴等を不逞のやからといったが、それどころじゃない。けだものだ」
「何かしたんですか」
「先刻、オート三輪車に乗って、騒いでやがった。講和条約が結ばれようとしているときに、何という不謹慎だ。岩田の奴におだてられて、のさばるくせがついてしまったのだ。岩田の奴は、赤だぞ」
石造は、在郷軍人会の支部長をやっていた人が、軍需会社の重役をしていた人が、赤ん坊のようなことをいうと思った。一体、オート三輪車と、けだものと、どういう関係があるのだろう。まして岩田さんと赤とはなんの関係もない。石造はいった。
「思いちがいですよ。旦那。岩田さんはただの人間でさあ。今朝、郵便局の自転車に乗って、くしゃみをしてました。この暑いのに、鼻風邪をひいたっていうんですがね」
「いや、お前たちは赤禍のとりこになっている。仕様のない豚だ」
山本は、豚の飼育場を思いうかべた。豚の群。汚ならしさ。鼻のゆがむような糞便の腐敗臭。愚鈍な顔。旺盛な繁殖力。追い立てれば追い立てられた方へ動く、精神のない盲目の群。この盲目の群が、この五年間、まるで自分たちの天下が来たように、振舞おうとしたのだ。今日の政治のデカダンスは、彼等が導いたのだ。しかしもうそうは行かない。非理法権天だ。彼は、豚を軍刀で斬ったときのことを思いうかべた。一刀のもとだった。ちょこなんと短い脚を空に向けて転っていた。びっくりしたような頓馬な小さい眼。一人前に地面に血を流してやがった。石造は、理解の行かない顔をしていった。

「旦那。近所の者らと、豚とは、何の関係もねえんだが」
「米よこせ運動をやったのは、お前らじゃないか」
「旦那」と石造は、首を振った。「わたしには判らねえ。豚なのかもしれねえが、わたしには、ただの人間と見えますがな」
山本は、石造に愛想をつかした。こいつも豚だ。
「台所へ行って、茶でも飲むといい」と山本は、いいすてて、家へ入った。
石造は、仕事をやめずに大きな鋏を両手で動かしつづけた。買物に通りかかったくら子が、しばらくそれを見ていた。日にやけた無心な仏像のような顔。物のような動き。石造さんは、いま何も考えてない、と彼女は思った。鋏はリズムをもって音を立てていた。青い葉をつけた枝が、ばさり、ばさりと落ちた。昨年も、石造さんはいまごろ手入れをしていた。しかし木は、すぐ伸びる。無駄な仕事だわ。わたしの一日だって、毎日、毎日、無駄の繰り返しなのだ。食べるために生き、生きるために食べる生活。それだけの生活。わたしは疲れてしまった。
「おじさん。御精が出ます」と彼女は、愛想笑いをうかべながら、声をかけた。
「おう」と石造は上から笑った。「近所のおかみさんや子供連中がみんな出かけたで、今日はひっそりしているだろう」
「ええ」とくら子は、淋しそうに笑った。「ひっそりしてるわ。……おじさん。木はいいわね。わたしは一年近くも頭の手入れをしたことないわ。ほんとにわたし死にたくなる。おじさんなんかそんなことないでしょう」
「死ぬ？　……当り前だよ。当り前のことを考えたってはじまらねえよ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com